第8章 「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

001 通貨ペアの特徴を知ろう【1】―ドルストレートとクロス円 … 112
002 通貨ペアの特徴を知ろう【2】―ドル／円 … 113
003 通貨ペアの特徴を知ろう【3】―ユーロ／ドル … 114
004 通貨ペアの特徴を知ろう【4】―ポンド／円 … 115
005 通貨ペアの特徴を知ろう【5】―豪ドル／円 … 116
006 リスク回避とリスク選好の奇っ怪な関係 … 117
007 値動きやチャートの相性から主戦通貨ペアを絞り込もう … 118

コラム ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール
世界的な金融緩和と新興国の急成長の密接な関係 ---------- ⓫⓪
新興国の金融引き締めは先進国にとってマイナス ---------- ⓬⓪

第8章 「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

001

通貨ペアの特徴を知ろう【1】——ドルストレートとクロス円

第１章では通貨ペアについて大雑把に解説しましたが、ここではもう少し掘り下げてみましょう。中学の社会科、高校の地理の授業ではありませんが、国ごとの特徴や二国間の経済の関係などについて理解しておくと、相場予測に一役買います。第８章では、この点にスポットを当てていきます。

クロス円は、ドル／円と他のドルストレートとの合成通貨ペアだから両方の相場の影響を受ける

日本人がトレードするときには、やはり円が絡む通貨ペアを中心に置くことが圧倒的に多いのではないでしょうか。中には、ＦＸを始めるまで、通貨ペアは皆、同じ仕組みで取引されていると考えていた方も多いはずです。ところが、実際にＦＸの勉強を始めると、「クロス円」という聞き慣れない言葉を耳にします。円が絡む通貨ペアのうち、クロス円でないのは「ドル／円」だけです。

ここまでは、初めての方でも理解していただきたいことですが、これ以降は、ちょっと複雑怪奇な話になります。したがって、「ここまででもかなり一杯一杯だから……」という方は、トレードに慣れて、いろいろなことが整理できた段階で、もう一度、この第８章に戻ってきてください。

▶▶クロス円はドルストレートの「合成通貨ペア」

ドルストレートとは、ドルが絡む通貨ペアのことで、ドル／円のほか、ユーロ／ドルやポンド／ドル、豪ドル／ドル、ドル／スイスフラン、ドル／カナダドルといった具合です。

そして、これらのドルストレートを組み合わせることで、クロス円ができあがります。つまり、クロス円はドルストレートの合成通貨ペアというわけです。たとえば、ユーロ／円は「ドル／円」と「ユーロ／ドル」を合成することでできあがります。仕組みは上の図のように、ユーロ／円を買うときには、舞台裏で「ドル／円を買って、ユーロ／ドルも買う」という取引が行われています。

そして、ユーロ／ドルもドル／円も売られると、ユーロ／円はさらに大きく下落します。クロス円の相場は、２つの通貨ペアの影響を強く受けるだけでなく、ユーロ／円を取引したい輸出入をする実需筋や個人投資家の影響も受けるからです。これが、クロス円特有の「上昇はゆるゆる、下落は急」の正体でもあります。また、あとで「リスク回避の円買い」という不思議な言葉を目にすることになりますが、これも「合成通貨ペア」の仕組みを知っていればこそ、理解できるというものです。

本書の無断複写・複製（コピー）・転載は、特定の場合を除き、製作者に対する権利侵害になります。©FPO Co.,Ltd.

第8章 「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

002

通貨ペアの特徴を知ろう【2】——ドル／円

日本人投資家の多くは、ドル／円からトレードを始めます。初心者の頃は大きな値動きが怖いだけでなく、一番馴染みの深い通貨ペアだからです。しかし、本当に利益を手にして大きなお金を動かすとき、価格変動リスクを最小限に抑えるために、やっぱりドル／円をトレードします。

ほとんどの方が最初に取引するのは、多くの場合、ドル／円でしょう。日本人が外国為替取引をするときに、最も馴染み深く、値動きが比較的おとなしい通貨ペアだからです。世界の基軸通貨であるドルと日本の通貨である円ですから、日本にいる以上、ドル／円に関連する情報が最も多く手に入ることも、その理由の１つといえるでしょう。

また、初心者の方が意識しているかしていないかは別にして、ドル／円は、ユーロ／ドルに次ぎ、世界で２番目の取引量ということも通貨ペア選びで重要な動機付けになります。

▶▶安全なトレードの根拠となる「高い流動性」

取引量が非常に多いということは、単に金額だけでなく、取引している参加者（市場参加者）も非常に多いことを意味します。取引量も市場参加者も多ければ、それだけ**「取引の連続性が高い」、つまり「流動性が高い」**ということになります。

▶ドル／円

通貨ペアの主な特徴	個別通貨の特徴
ユーロ／ドルに次いで流動性が高く、安定的な値動きが期待できる。有事には、ドルが買われることもある	基軸通貨：世界最大のGDPと通貨流通量を誇るが、恒常的な財政赤字が問題。リーマン・ショック以降、雇用と不動産市況の回復が遅く、デフレ化の懸念も 量的緩和によるドルのばらまきはドル売り要因に。量的緩和が続けば、理解不能の円高に直面。金相場とは逆相関の関係
入門したての投資家が最初に手がける通貨ペアだが、大きな資金を動かす投資家も好む	
政府・日銀が為替介入をするときの指標となる通貨ペア。値幅狙いならクロス円がお薦め	世界最大の財政赤字国：少子・高齢化による社会保障費の増大で、世界一の債務を抱える。国債の利回り上昇は死活問題。財政赤字の垂れ流しは、将来の猛烈な円売りにつながる恐れ 超円高が定着すれば、日本の輸出産業は海外へ逃避。輸出企業の資金回帰が減少して、円高圧力が緩和する可能性。日本の貿易収支には今後いっそう注意
ユーロ／ドルとは対称的な動きをすることが多い。ただし、世界的にリスクを取れる環境になれば、日本の低金利を背景にキャリートレードの復活も	

流動性が高ければ高いほど、買いたいときや売りたいときに取引できる＝約定できることが最大のメリットです。しかも、成行で注文しても大きな価格のズレが起きないことも挙げられます。流動性が低ければ低いほど、価格の連続性が乏しくなります。

たとえば、80.00円のときに成行注文のボタンを押せば、その値段で約定することが非常に重要です。成行注文を出したのに、10銭も20銭も違うレートで約定してしまえば、安心して取引することはできません。

その反面、流動性が高いということは、為替レートが大きく動かないため、「面白味に欠ける」という投資家もいます。トレードに醍醐味を求めるのか、それとも安全性と約定の安定性を求めるのかは投資家次第です。しかし、初心者のときは、**流動性の高い通貨ペアで慣れてから、徐々に値動きの大きい通貨ペアで取引する**ことをお薦めします。したがって、最初はこの「ドル／円」か、次項で解説する「ユーロ／ドル」から始めるのが最適です。長く続けるためにも、この点をしっかり守ってくださいね。

本書の無断複写・複製（コピー）・転載は、特定の場合を除き、製作者に対する権利侵害になります。©FPO Co.,Ltd.

第8章 「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

003

通貨ペアの特徴を知ろう【3】——ユーロ／ドル

世界最大の取引量を誇るユーロ／ドルは、スムーズな値動きが特徴です。しかし、いまや欧州の信用不安が拡大し、一方の米ドルも基軸通貨の信任が揺らぐほど紙幣を増刷しています。そのため、欧米の財政問題が解決しない限り、大きなうねりを描き続けるかもしれません。

世界三大通貨といえば、ドル、ユーロ、円。そのうち、ユーロ／ドルは世界最大の取引量を誇る通貨ペアです。取引量が多いドル／円といえども、ユーロ／ドルの足下にも及びません。それだけに、他の通貨ペアに比べて値動きが圧倒的に滑らかです。

リーマン・ショック以降、主要先進国の景気は思うように回復せず、各国の政府や中央銀行は、その対応に苦しんでいます。しかも、ユーロ圏ではギリシャ危機に端を発した債務問題が深刻化し、ポルトガルやスペイン、イタリアにまで波及。その結果、世界最大の取引量を誇るユーロ／ドルといえども、荒っぽい値動きをすることが多くなってきました。

▶▶最近は初心者でもユーロ／ドルからトレードを始める人も

流動性が高い上に、一定の値動きが期待できるとなれば、トレードする通貨ペアとしての魅力は高まります。そのため、比較的大きな資金を動かす投資家だけでなく、最近は初心者でもユーロ／ドルから始める方が増えているようです。ちなみに、**相場の変動が大きくなることを「ボラティリティが上がる（高くなる）」**といいます。

チャートを見ると、ボラティリティが高い相場は「儲かりそう」と思えますが、実際にその中でトレードすると、想定外の値動きによりストップロスオーダーにかかったり、めまぐるしく動く相場を後追いして、気付かないうちに逆張りになって損失が膨らんでしまうケースがあります。

ユーロ／ドルは群を抜いた流動性だけに、欧州の信用不安が収束に向かえば、大きなボラティリティも収まるでしょう。そういう意味では、平時でも有事でも手がけられる万能な通貨ペアです。

また、ドルストレートであるだけに値動きに「ねじれ」がありません。同じユーロでも、ユーロ／円はユーロ／ドルとドル／円の合成通貨ペアですから、どちらかの影響を強く受けるとレンジ相場に陥ってしまう恐れがあります。この点を踏まえると、**チャート分析を軸にトレードする投資家は、ユーロ／ドルなどの主要なドルストレートを主戦場とすべき**でしょう。

▶ユーロ／ドル

通貨ペアの主な特徴

- 世界最大の流通量を誇る通貨ペア。値動きの安定性は一番のはずも、欧州信用不安の深刻化で安定性に陰りも
- FXはユーロ／ドルに始まりユーロ／ドルに終わるといわれるほどで、特にテクニカル分析主導のトレードには好相性
- ユーロ圏と米国はともに、輸出の増加を期待して通貨安政策を推進。信用不安はユーロ安政策の一環という専門家も
- ユーロ／円をトレードするときには必ずチェックしなければならない通貨ペア

個別通貨の特徴

基軸通貨

- 欧州信用不安によるドル高は、米国経済の回復を遅らせる可能性。過剰流動性相場では、ユーロ／ドル上昇が基本のため、闇雲にドル買いをするのは自重
- 意外にも、ドル／円ほど米国の雇用統計の影響を受けない。米国はユーロ圏からの輸入が非常に少ないことも影響か

慢性的な信用不安

- 中国経済との関係が密接なため、中国の金融政策によってユーロが売られたり買われたりすることも記憶しておこう
- スイス国立銀行（中央銀行）はスイスフランが1.2ユーロを割り込めば無制限に介入することを決定。スイスフラン売りが発動されれば、ユーロ／ドルが急騰する可能性は充分

本書の無断複写・複製（コピー）・転載は、特定の場合を除き、製作者に対する権利侵害になります。©FPO Co.,Ltd.

第8章 「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

004

通貨ペアの特徴を知ろう【4】——ポンド／円

政府・日銀が為替介入を実施すると、最も値を飛ばす対円通貨ペアがポンド／円。価格水準がクロス円の中で最も高いだけに、値幅取りを狙うなら、この通貨ペアをおいて他にありません。ということは、下がるときも値幅の面では最も大きく動きます。何事も一長一短です。

100年に一度の経済危機といわれたリーマン・ショックの引き金となったサブプライムローン問題が顕在化するまで、世界の外国為替市場は中国やインド、ブラジルの急成長を背景に、ユーロやポンド、豪ドルがドルや円に対して猛烈に買われました。先進主要国の経済が好調で政策金利が何度も引き上げられ、日本との金利差はかつてないほど拡大したからです。主要なクロス円は上昇トレンドが明確になり、買えば上がる、同時に大きなスワップも手に入るとして、金利差の大きかったポンド／円や豪ドル／円は個人投資家の間で人気になりました。

▶▶高ボラティリティは諸刃の剣

ポンド／円は、クロス円の中で最も為替レートが高く、通常でも変動幅が大きいのが特徴です。そのため個人投資家は、ポンド／円を主力通貨ペアとして好んで取引していました。

投資家は、**通貨ペアを選ぶときの条件として「値幅」に関心**を寄せます。

▶ポンド／円

通貨ペアの主な特徴

- 主要クロス円の中で、最も高い価格水準を維持。大きな変動幅を期待するなら、ポンド／円をおいて他にない
- 変動幅が大きいということは、安定性に欠ける面もあり、難易度は高め。どちらかといえば、経験豊富なトレーダー向き
- 欧州通貨でありながら、ユーロ／円とは異なる動きをすることもある。ユーロ／ポンドの動きにも影響を受ける
- 政府・日銀の為替介入があるときは最も値を飛ばす通貨ペア。介入前にうまく仕込めれば、濡れ手に粟

個別通貨の特徴

元・基軸通貨

- 元・基軸通貨。外国為替の取引量はロンドン時間が世界最大だが、核になる産業が乏しく、金融街シティを除けば、経済的には特徴がなくなりつつある
- リーマン・ショック前までは高金利通貨として注目された。欧州連合（EU）の一角を占めるが、ユーロ圏ではない
- 米国と同様、イングランド銀行が量的緩和をしている間は売られやすい。緩和量を上積みすれば、下落の可能性も

日本のデイトレーダーの間では「殺人通貨ペア」の異名で恐れられたことも

※「円の特徴」は、ドル／円を参照してください

どれくらいの割合で儲かったかではなく、どれだけの値幅を稼いだかが重要というわけです。たとえば、ドル／円が80.00円、ポンド／円が120.00円のとき、どちらも１％の利益を獲得したとすると、ドル／円は0.8円、ポンド／円は1.2円となり、ポンド／円に「お得感」があります。

しかも、ドル／円に比べて取引量が少ない（流動性が低い）ため、相場のアップダウンは大きくなります。相場は上がり続けるか、下がり続けるか、もしくは比較的大きな値幅で上下動を繰り返すことがないと儲けることはできません。ポンド／円は、大きな上下動を交えながらトレンドが出る性格を持っていることも、ＦＸ投資家の心をつかんだのでしょう。

しかし、トレンドが出ても、大きな変動を伴う展開は諸刃の剣。かなりの相場巧者でも儲けるのに一苦労するくらいです。一時、腕利きのデイトレーダーたちから「殺人通貨ペア」といわれたことも頷けます。**高ボラティリティの通貨ペアは大きな利益をもたらしてくれる反面、ストップロスオーダーをしっかり管理**しないと、その反対もあるというわけです。

本書の無断複写・複製（コピー）・転載は、特定の場合を除き、製作者に対する権利侵害になります。©FPO Co.,Ltd.

005

通貨ペアの特徴を知ろう【5】——豪ドル／円

南半球にあるオーストラリアは、先進国とはいえ、決して経済規模の大きな国ではありません。ところが、農産物や天然資源に恵まれ、中国を中心にした新興国との貿易が盛んなだけに経済は好調。そして、日本の投資家が最も好んでトレードする代表的な通貨ペアが豪ドル／円です。

日本の個人投資家に最も人気のあるのが豪ドル／円。大阪証券取引所が運営する大証ＦＸでは、2011年に豪ドル／円の取引高がドル／円のそれを上回りました。これには、いくつかの理由が考えられます。

日豪の金利差と、それに伴ってチャート形状が比較的上昇トレンドを描きやすい点だったのでしょう。為替レートを決定づける根拠の１つは金利差。個人投資家がＦＸを始めるときには必ず、金利差を徹底的に印象づけられます。オーストラリアの政策金利は日欧米各国と比べて、ほぼ継続的に高い水準にあり、分かりやすいということでしょう。

▶▶リーマン・ショック後に、いち早く立ち直った豪州経済

2008年のリーマン・ショックは、投資をしていなかった人にとっても衝撃的な出来事でした。世界的な金融混乱はオーストラリアにも波及し、豪ドル／円はリーマン・ショック前の高値から半値に近い水準まで売り込まれました。しかし、中国との貿易の割合が高く、原油は産出していなくても、鉱物資源や穀物に恵まれるオーストラリアは、中国経済の巻き返しもあって、先進主要国の中ではいち早く景気回復の軌道に乗りました。

その結果、先進各国に先駆けて政策金利を複数回引き上げ、オーストラリアと日米欧各国の金利差は拡大していきました。

リーマン・ショック後は、ギリシャを中心にした欧州で財政懸念が深刻化。それを市場が嫌う状態になると豪ドルも急落することがありました。しかし、外国為替相場を決定づける金利差がある以上、相場の回復も早く、急落しても徐々に右肩上がりのチャートを形成しました。**右肩上がりのチャートは個人投資家にとって分かりやすい**ものです。「上がる＝買い」という習慣が染みついているからなのかもしれません。

また、巨額の財政赤字と世界最大規模の借金を抱える日本の円が買われるドル／円相場より、景気が悪く超低金利の国の通貨が売られ、景気が良くて金利の高い通貨が買われるという構図は分かりやすいと思います。なお、ＮＺドル／円も似たような動きをすると考えて良いでしょう。

▶豪ドル／円

通貨ペアの主な特徴

- 日本の個人投資家が最も好む通貨ペア。一時は、ボーナスが出る時期に上昇するという神話さえ生まれたこともある
- 変動幅はポンド／円に次いで大きく、値幅狙いや、デイトレードをする投資家に好相性
- 政策金利は先進国の中で高めの水準を維持しているため、下落しても修復力が高いケースが多い
- 過剰流動性による資源高が起きれば、いの一番に買われる通貨ペア。ドル／円の影響も受けやすいため、テクニカル主導なら豪ドル／ドルがお薦め

個別通貨の特徴

資源国通貨

鉱物資源が豊富。特にウランや金の産出量は世界屈指。資源需要が高まると経済が活性化しやすい。米国に財政不安が起きれば、金価格が上昇するため、豪ドルに注目したい。産油国と勘違いする投資家も多いが、原油はそれほど出ない

中国との関係が密接なため、中国の経済が失速するとダメージは大きい。対日貿易も盛んで、日本は輸出相手国で3本の指に入る

証拠金を有効利用したいときは
NZドル／円の選択も一考。ただし
まったく同じ動きにならないことには注意
※「円の特徴」は、ドル／円を参照してください

本書の無断複写・複製（コピー）・転載は、特定の場合を除き、製作者に対する権利侵害になります。©FPO Co.,Ltd.

第8章 「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

006

リスク回避とリスク選好の奇っ怪な関係

不景気で借金大国の日本の円がなぜ買われるのか？　FXをしていなければ理解できなかったかもしれませんね。外国為替は通貨ペアで取引されますから、一方の通貨を持ちたくなければ、もう一方が消去法的に買われます。この背景にあるのが、リスクを取れるか取れないか。難しいですね！

世界の金融市場が悪化して、市場参加者がリスクを回避したいとき、円とスイスフランが買われることがあります。これを「リスク回避の円買い（スイスフラン買い）」といい、このような状況を「リスクオフ＝リスク回避」、リスクが取れる状況を「リスクオン＝リスク選好」といいます。

市場環境がリスクオフになって、スイスフランや円が買われるということは、リスクオンのときは、対円、対スイスフランの通貨ペアの相手が買われることになります。つまり、リスクオンで買われるのは、ユーロやポンド、豪ドルというわけです。

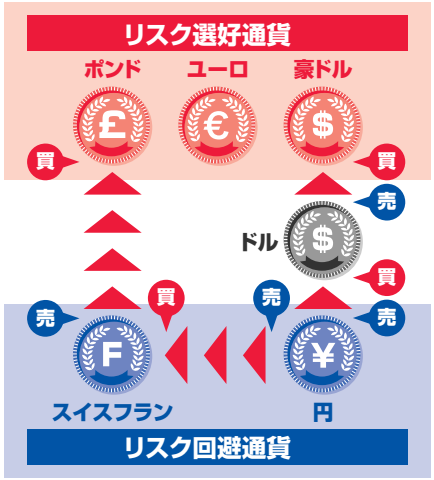
▶▶通貨ペアとリスクのオン・オフの関係を覚えよう

この仕組みをもう少し詳しく説明しましょう。たとえば、ユーロ／ドルとユーロ／スイスフラン、ドル／スイスフランがあったとしましょう。リスクオンの状態では、どの通貨ペアも上昇します。ところが、リスクオフになったときは当然、すべてが下落します。グローバルマネーが逃げる先を模索するような市場環境では、それが顕著です。

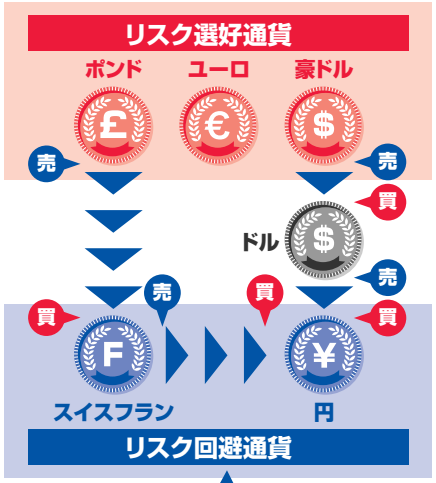
ここで不思議なのは、リスクオフのときにユーロ／ドルではドルが買われるということでしょう。ドルは世界の基軸通貨で、ドルを発行する米国の国債は最も安全な投資先（リスク回避先）とされているため、ユーロを売ってドルを買った資金は米国債に向かいます。未来永劫、このメカニズムというわけではありませんが、少なくとも米国債の格付けが高水準を維持しているかぎりは続くでしょう。事実、戦後初めて、米国債の格付けが引き下げられたあとも、米国債の価格は上昇し、金利は低下しました。

これにドル／円を加えてみましょう。世界最大の取引量を誇るユーロ／ドルではドルが買われて、その一部が米国債に向かうとしても、ドルを持ちすぎることになります。これを解消するためにドルを売って円を買うという動きが活発化します。そのため、リスク回避先の通貨である円やスイスフランは極度の通貨高に悩まされることになります。防衛策としてスイス国立銀行は、対ユーロのレートに下限を設定して歯止めをかけました。

▶リスク選好（オン）の流れ



▶リスク回避（オフ）の流れ



世界的な金融危機や信用不安が起きると、リスク選好通貨を持ちたくないから、結果的に円が買われてしまうことが多い

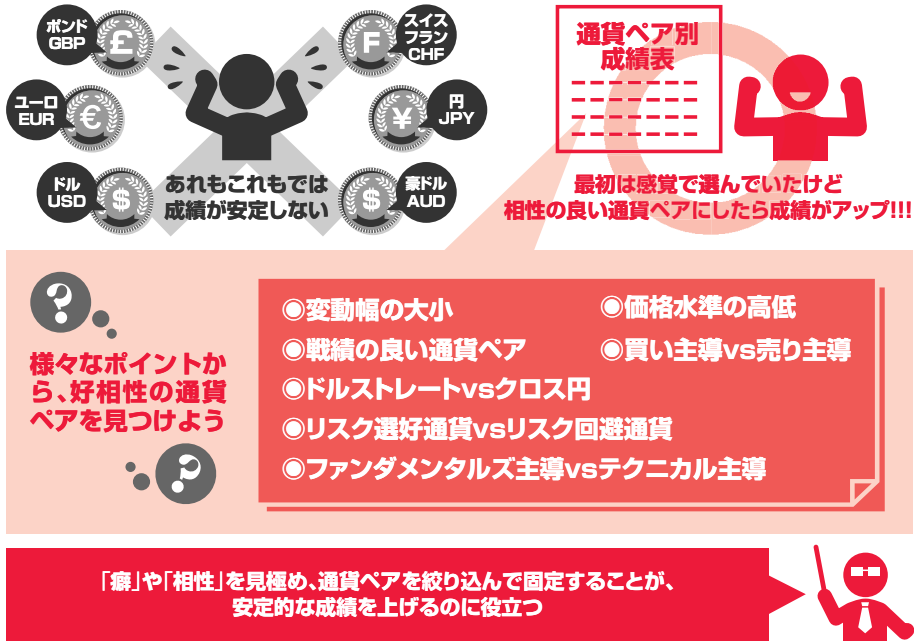
本書の無断複写・複製（コピー）・転載は、特定の場合を除き、製作者に対する権利侵害になります。©FPO Co.,Ltd.

第8章 「通貨ペアの特徴」を理解して取引の精度を高めよう

007

値動きやチャートの相性から主戦通貨ペアを絞り込もう

人には得手不得手が必ずあります。文章を書くのが得意な人もいれば、話をするのが得意だという人もいます。FXも同じです。変動が大きい通貨ペアが得意な人もいれば、小刻みに動く通貨ペアなら儲けられるという人もいます。相性の良い通貨ペアを早く見つけることも、勝利への近道です。



通貨ペアには「癖」があります。これはチャートを見て感じることもあれば、他の通貨ペアと比較して感じることもあります。また、すでに説明したように、流動性から来る変動幅やトレンドなども、そうです。

一方、投資家と通貨ペアの間にも相性があります。トレードに慣れてきたら、いろいろな通貨ペアを試すのは勉強のうちですが、経験を積んでいく過程で、主戦となる通貨ペアを絞り込んでいくことも重要です。

「癖」と「相性」がある以上、あれやこれやとつまみ食いをするより、一定の通貨ペアに固定したほうが、先々、圧倒的に有利だからです。

▶▶通貨ペアごとに戦績を確認する

ボラティリティが高い通貨ペアが性に合っている投資家がいれば、変動が小さくても小刻みに利益を積み重ねるのが得意な投資家もいます。また、出入りの激しい＝大勝ちしたり大負けしたりするのを繰り返すのが好きな投資家もいます。どれが良くて、どれが悪いというわけではありません。相場はある種、結果オーライの世界ですから……。

しかし、数多くのトレード経験を積み重ねていくと、通貨ペアとの相性が分かるようになってきます。そういうとき、できるだけ感覚ではなく、数値として確認することが重要です。

ユーロ／ドルやユーロ／円では圧倒的な戦績を誇っているのに、豪ドル／円はからっきしの苦手という投資家がいました。何が理由かは、本人にも分からないそうですが、実際に過去の戦績を見せてもらうと、豪ドル／円の勝率は格段に低く、まともに利益を手にしていません。そのため、いつからか豪ドル／円に手を出すのをやめたそうです。単に勝ち負けの数だけでなく、利益と損失のバランス、もちろん合計損益もしっかり確認して、相性を確認することを忘れないようにしてください。

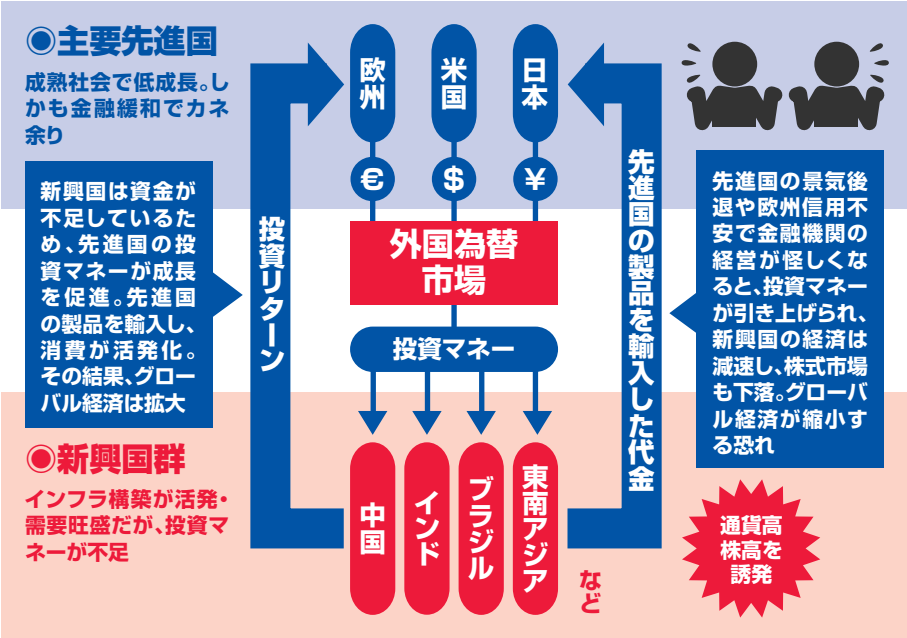
このように書くと、「通貨ペアは１つ？」と疑問を持たれます。頻繁にトレードするのは、３通貨ペアくらいを目安にすると良いでしょう。**「通貨ペアの相性」を早く見極めることは、とても大切なこと**です。

本書の無断複写・複製（コピー）・転載は、特定の場合を除き、製作者に対する権利侵害になります。©FPO Co.,Ltd.

・コラム――ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール

世界的な金融緩和と新興国の急成長の密接な関係

主要先進国は景気がなかなか上向かない中、新興国の経済は好調です。発展途上の国の経済が成長段階に移るとき、欠かせないのが外国からの投資。その原動力になっているのが先進国の金融緩和によるカネ余りです。しかし、過剰な投資はいずれバブル経済に発展し、成長の寿命は短くなります。



先進国の経済は成熟して高い成長が見込めなくなっています。しかし、ブラジル、ロシア、インド、中国、南アフリカなどの新興国の経済は好調。この５大新興国の英語の頭文字をとって「BRICS」といわれています。

中国やインド、ブラジルは、人口が多い反面、社会基盤の近代化が遅れ、以前は発展途上国や後進国といわれていました。当然、経済も振るいません。しかし、経済に国境がなくなりグローバル化が進むと、先進国の競争は激化。人件費の低い発展途上国に工場などの生産拠点を移すことでコスト削減を図り、より多くの利益を手にしようとしました。そうなれば、発展途上国の経済は潤い、国民の収入は増え、消費が活発化。この好循環が、高い経済成長をもたらしました。

▶▶発展途上国がいまや世界経済をけん引する存在に

主要な新興国は膨大な人口を抱えています。コスト削減を狙って進出した先進国の企業にとって成長する途上国は、いつしか、お金を使ってくれる「大切なお客さん」に。中国は13億人以上、インドは11億人以上の国民がいますから、特にアジア圏の新興国は企業にとって魅力的です。日米欧の世界三大経済圏をもってしても、この人口には遠く及ばないからです。

発展途上の国が成長するときは、道路や鉄道、空港が整備され、質素な生活をしていた国民は家電製品や携帯電話を買い求め、家を持つようになります。そうなると原油だけでなく、鉄やレアメタルやレアアースを大量に消費します。日本の1960年代は新幹線や高速道路が整備され、多くの人が家を買い求め、高度成長期を実現。2000年代に入ると、パソコンや携帯電話を誰もが持つようになりました。中国やインドなどのアジアでは20億人規模で、日本での２つの成長期が同時に訪れているというわけです。

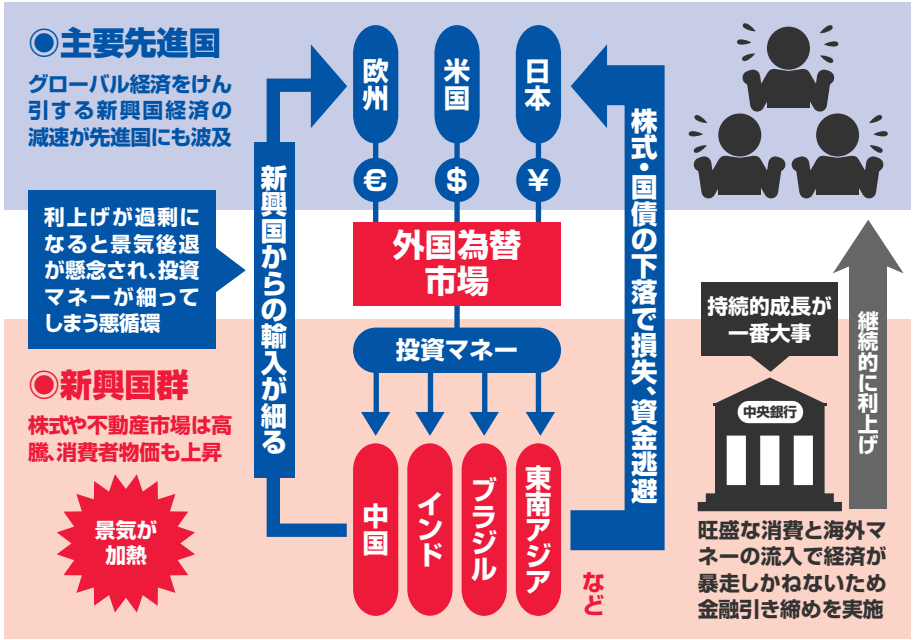
ただし、昔に比べて、経済成長のスピードは加速しているため、頭打ちになるのも早いかもしれません。上昇する傾向にある新興国の金利が下落に転じるとき、ソフトランディングできるのか、バブルが破裂するのか、世界経済の行く末は、新興国の政府と中央銀行に委ねられています。

本書の無断複写・複製（コピー）・転載は、特定の場合を除き、製作者に対する権利侵害になります。©FPO Co.,Ltd.

▪コラム――ちょっとタメになる「ケーザイ・経済」ゼミナール

新興国の金融引き締めは先進国にとってマイナス

急成長を続ける新興国にとって、大きな課題は成長の寿命をいかに長くするかです。そのため、政府・中央銀行は金利を上手に調節して経済が暴走しないようにします。しかしこれは、一時的に消費意欲が下がるため、先進国の経済にも大きな影響を及ぼします。



道路や鉄道などのインフラ整備と、消費や投資を中心にした高度経済成長が同時に起きている新興国の景気には過熱感が現れています。好景気を長続きさせたい政府や中央銀行は、景気の過熱を防ぐために金利を引き上げるなどして金融を引き締め、経済をコントロールしようとします。

金融引き締めには政策金利の引き上げのほか、中央銀行が保有している国債を銀行に買ってもらい、お金を吸い上げることがあります。また、一般の銀行は、中央銀行にお金を預けることを義務付けられています。その額は中央銀行が決めますが、より多くのお金を中央銀行に預ければ、一般の銀行はお金を貸すことにブレーキを踏まざるを得ません。これによって、投資や投機を抑えるわけです。ここで再び外国為替の話に戻りましょう。

▶▶景気が過熱する新興国は金融引き締めに躍起

世界各国との貿易が最も多い中国が金融を引き締めると、外国為替相場に激震が走ることがあります。つまり、ドルやユーロ、ポンドや豪ドルといったほとんどの主要通貨は売られてしまいます。

なぜなら、**新興国の経済活動が減速すれば、回復しそうな先進国の景気は足踏みし、金利の正常化＝政策金利の引き上げが遠のく**からです。先進国の経済が良くなるのも悪くなるのも、中国やインドなどの新興国の景気次第というわけです。

外国為替取引は２つの国の通貨が対象。片方の通貨が下がれば、相手の通貨が上がります。たとえば、中国の金融引き締めでドルや豪ドルが売られると、その相手となる円は必然的に買われます。中国の金融引き締めによる経済の減速は貿易面で日本に大きな影響を及ぼしますが、相対的に円が買われてしまうため、為替レートへの影響も大きいのです。

また、地理的な要因もあります。経済成長が著しい新興国は中国やインドだけではありませんが、世界の人口の半分近くを数えるアジア圏を１つの経済圏と見ているとの指摘もあります。日本にいると何だか不思議な感じがしますが、これが外国為替市場の「常識」になりつつあります。

本書の無断複写・複製（コピー）・転載は、特定の場合を除き、製作者に対する権利侵害になります。©FPO Co.,Ltd.